

或敵打の話

芥川龍之介



発端

肥後の細川家の家中に、田岡甚太夫と云う侍がいた。これは以前日向の伊藤家の浪人であったが、当時細川家の番頭に陞っていた内藤三左衛門の推薦で、新知百五十石に召し出されたのであった。

ところが寛文七年の春、家中の武芸の仕合があつた時、彼

は表芸おもてげいの槍術そうじゆつで、相手になつた侍を六人まで突き倒した。その仕合には、越中守綱利えつちゆうのかみつなどし自身も、老職一同と共に臨んでいたが、余り甚太夫の槍が見事なので、さらに劍術の仕合をも所望しよもうした。甚太夫は竹刀しなひを執とつて、また三人の侍を打ち据えた。四人目には家中の若侍に、新陰流しんかげりゆうの劍術を指南しんぼくしている瀬沼兵衛せぬまひようえが相手になつた。甚太夫は指南番の面目めんぼくを思つて、兵衛に勝を譲ろうと思つた。が、勝を譲つたと云う事が、心あるものには分るように、手際よく負けたいと云う気もないではなかつた。兵衛は甚太夫と立合いながら、そう云う心もちを直覚うけだちすると、急に相手が憎にくくなつた。そこで甚太夫がわざと受太刀うけだちになつた時、奮然と一本突きを入れた。甚太夫は強く喉のどを突かれて、仰向けあおむにそこへ倒れてしまった。その容ようす子すがいかにも見苦しかった。綱利つなどしは彼の槍術を賞しながら、こ

の勝負があつた後は、のち甚はなはだ不興ふきよう気な顔をしたまま、一言も彼いちごんを犒たぐわなかつた。

甚太夫の負けざまは、間もなく蔭口かげぐちの的になつた。「甚太夫は戦場へ出て、槍の柄を切り折られたら何とする。可哀かわいや剣術は竹刀しなひさえ、一人前には使えないそうな。」——こんな噂うわさが誰云うとなく、たちまち家中かちゆうに広まつたのであつた。それには勿論同輩の嫉妬しつとや羨望せんぼうも交まじつていた。が、彼を推挙した内藤三左衛門ないとうさんざえもんの身になつて見ると、綱利の手前へ対しても黙もくつている訳には行かなかつた。そこで彼は甚太夫を呼んで、「ああ云う見苦しい負を取られては、拙者の眼がね違いばかりではすまされぬ。改めて三本勝負を致されるか、それとも拙者が殿への申訳けに切腹しようか。」とまで激語した。家中の噂を聞き流していたのでは、甚太夫も武士が立たなかつた。

彼はすぐに三左衛門の意を帯して、改めて指南番瀬沼兵衛と三本勝負をしたいと云う願書を出した。

日ならず二人は綱利の前で、晴れの仕合をする事になった。はじめは甚太夫が兵衛の小手を打った。二度目は兵衛が甚太夫の面を打った。が、三度目にはまた甚太夫が、したたか兵衛の小手を打った。綱利は甚太夫を賞するために、五十石の加増を命じた。兵衛は蚯蚓腫になった腕を撫でながら、悄悄綱利の前を退いた。

それから三四日経つたある雨の夜、加納平太郎と云う同家中の侍が、西岸寺の塀外で暗打ちに遇つた。平太郎は知行二百石の側役で、算筆に達した老人であつたが、平生の行状から推して見ても、恨を受けるような人物では決してなかつた。が、翌日瀬沼兵衛の逐天した事が知れると共に、始めてその敵

が明かになった。甚太夫と平太郎とは、年輩こそかなり違っていたが、背恰好せいかつこうはよく似寄っていた。その上定紋じょうもんは二人とも、同じ丸だに抱だき明姜みよがであつた。兵衛はまず供の仲間ちゆうげんが、雨の夜路を照らしている提灯ちようちんの紋あざむに欺かれ、それから合羽かつぼに傘かさをかざした平太郎の姿に欺かれて、粗忽そこつにもこの老人を甚太夫と誤つて殺したのであつた。

平太郎には当時十七歳の、求馬もとめと云う嫡子ちやくしがあつた。求馬は早速公おおよけ ゆるしの許を得て、江越喜三郎えごしきさぶろうと云う若党と共に、当時の武士の習慣通り、敵打かたきうちの旅のほに上る事になつた。甚太夫は平太郎の死に責任の感を免まぬかれなかつたのか、彼もまた後見うしろみのためねんゆうに旅立ちたい旨を申し出でた。と同時に求馬もとめと念友ねんゆうの約があつた、津崎左近つざきさこんと云う侍も、同じく助太刀すけだちの儀を願ひ出した。綱利きんりは奇特きせきの事とあつて、甚太夫の願は許したが、左近

の云い分は取り上げなかつた。

求馬は甚太夫喜三郎の二人と共に、父平太郎の初七日しよなぬかをす
ますと、もう暖国の桜は散り過ぎた熊本くまもとの城下を後にした。

一

津崎左近つぎきざこんは助太刀の請こいを却しりぞけられると、二三日家に閉じこ
もっていた。兼ねて求馬もとめと取換した起請文きしようもんの面おもてを反故ほんこにする
のが、いかにも彼にはつらく思われた。のみならず朋輩ほうばいたち
に、後指うしろゆびをさされはしないかと云う、懸念けねんも満更ないではな
かつた。が、それにも増して堪え難かつたのは、念友ねんゆうの求馬
を唯一人甚太夫しんだゆうに託すと云う事であつた。そこで彼は敵打かたきうちの

一行が熊本の城下を離れた夜、とうとう一封の書を家に遺して、彼等の後を慕うべく、双親にも告げず家出をした。

彼は国境を離れると、すぐに一行に追いついた。一行はその時、ある山駅の茶店に足を休めていた。左近はまず甚太夫の前へ手をつきながら、幾重にも同道を懇願した。甚太夫ははじめにがにがに、「身どもの武道では心もとないと御思いか。」と、容易に承け引く色を示さなかつた。が、しまいには彼も我を折つて、求馬の顔を尻眼にかけながら、喜三郎の取りなしを機会にして、左近の同道を承諾した。まだ前髪まえがみの残つてゐる、女のような非力ひりきの求馬は、左近をも一行に加えたい気色けしきを隠す事が出来なかつたのであつた。左近は喜びの余り眼に涙を浮べて、喜三郎にさえ何度となく礼の言葉を繰返くりかえしてゐた。

一行四人は兵衛の妹婿が浅野家の家中にある事を知つていたから、まず文字が関の瀬戸を渡つて、中国街道をはるばると広島の下まで上つて行つた。が、そこに滞在して、敵の在処を探る内に、家中の侍の家へ出入する女の針立の世間話から、兵衛は一度広島へ来て後、妹婿の知るべがある予州松山へ密々に旅立つたと云う事がわかつた。そこで敵打の一行はすぐに伊予船の便を求めて、寛文七年の夏の最中、恙なく松山の城下へはいつた。

松山に渡つた一行は、毎日編笠を深くして、敵の行方を探して歩いた。しかし兵衛も用心が厳しいと見えて、容易に在処を露さなかつた。一度左近が兵衛らしい梵論子の姿に目をつけて、いろいろ探りを入れて見たが、結局何の由縁もない他人だと云う事が明かになつた。その内にもう秋風が立つて、

城下の屋敷町の武者窓の外には、溝を塞いでいた藻の下から、追い追い水の色が拡がって来た。それにつれて一行の心には、だんだん焦燥の念が動き出した。殊に左近は出合いをあせつて、ほとんど昼夜の嫌いなく、松山の内外を窺つて歩いた。敵打の初太刀は自分が打ちたい。万一甚太夫に遅れては、主親をも捨てて一行に加わつた、武士たる自分の面目が立たぬ。——彼はこう心の内に、堅く思いつめていたのであった。

松山へ来てから二月余り後、左近はその甲斐があつて、ある日城下に近い海岸を通りかかると、忍駕籠につき添うた二人の若党が、漁師たちを急がせて、舟を仕立てているのに遇つた。やがて舟の仕度が出来たと見えて、駕籠の中の侍が外へ出た。侍はすぐに編笠をかぶつたが、ちらりと見た顔貌は瀬沼兵衛に紛れなかつた。左近は一瞬間ためらつた。ここに求

馬が居合せないのは、返えす返えすも残念である。が、今兵衛を打たなければ、またどこかへ立ち退いてしまふ。しかも海路を立ち退くとあれば、行く方をつき止める事も出来ないのに違いない。これは自分一人でも、名乗をかけて打たねばならぬ。——左近はこう咄嗟に決心すると、身仕度をする間も惜しいように、編笠をかなぐり捨てるが早いか、「瀬沼兵衛、加納求馬が兄分、津崎左近が助太刀覚えたか。」と呼びかけながら、刀を抜き放つて飛びかかった。が、相手は編笠をかぶつたまま、騒ぐ気色もなく左近を見て、「うろたえ者め。人違いをするな。」と叱りつけた。左近は思わず躊躇した。その途端に侍の手が刀の柄前にかかったと思うと、重ね厚の大刀が大袈裟に左近を斬り倒した。左近は尻居に倒れながら、目深くかぶつた編笠の下に、始めて瀬沼兵衛の顔をはつきり見る

事が出来たのであった。

二

左近さこんを打たせた三人の侍は、それからかれこれ二年間、敵かたき兵衛ひょうえの行く方ゆえを探たづねて、五畿内ごきないから東海道をほとんど隈くまなく遍歴へんれきした。が、兵衛の消息は、杳やうとして再び聞えなかつた。寛文九年かんぶんの秋、一行は落ちかかる雁かりと共に、始めて江戸の土を踏んだ。江戸は諸国の老若貴賤ろうにやくきせんが集まっている所だけに、敵の手がかりを尋ねるのにも、何かと便宜が多そうであつた。そこで彼等はまず神田の裏町うらまちに仮の宿を定めてから甚太夫じんたゆうは怪しい謡うたいを唱うてて合力ごうりきを請こう浪人になり、求馬もとめは小間物の箱を

背負せおつて町家ちやうかを廻あきゆうとる商人あきゆうとに化け、喜三郎きさぶろうは旗本はたもと能勢のせ惣右衛門そうえもんへ年期ねんきぎ切りの草履ぞうり取りにはいった。

求馬もとまは甚太夫しんたふとは別々に、毎日府内ちやうせくをさまよつて歩いた。物慣れた甚太夫は破れ扇あふぎに鳥目ちやうめくを貰いながら、根気よく盛り場うかがを窺うかがいまわつて、さらに倦うむ気色けしきも示さなかつた。が、年若としわかな求馬の心は、編笠あむがさに憔やつれた顔かほを隠して、秋晴れの日本橋にほんばしを渡る時でも、結局彼等の敵打かたきうちは徒勞たうらうに終つてしまひさうな寂さびしさに沈み勝ちであつた。

その内に筑波風つくばおろしがだんだん寒さを加え出すと、求馬は風邪かぜが元になつて、時々熱あつたが昂たかぶるようになった。が、彼は悪感おかんを冒しても、やはり日毎に荷あきないを負うて、商あきないに出る事を止めなかつた。甚太夫は喜三郎の顔を見ると、必ず求馬のけなげさを語つて、この主思しゆういの若党わかしやうの眼まなこに涙なみだを催もよほさせるのが常であつ

た。しかし彼等は二人とも、病さえ静に養うに堪えない求馬の寂しさには気がつかなかった。

やがて寛文十年の春が来た。求馬はその頃から人知れず、吉原の廓くわわに通い出した。相方あいかたは和泉屋いずみやの楓かえてと云う、所謂散茶女郎の一人であつた。が、彼女は勤めを離れて、心から求馬のため尽した。彼も楓のもとへ通つている内だけ、わずかに落莫とした心もちから、自由になる事が出来たのであつた。

渋谷しづやの金王桜こんおうおうの評判せんとうが、洗湯せんとうの二階に賑わう頃、彼は楓の真心に感じて、とうとう敵打かたきうちの大事を打ち明けた。すると思いがけなく彼女の口から、兵衛らしい侍が松江藩まつえの侍たちと一しよに、一月ひとつきばかり以前和泉屋へ遊びに来たと云う事がわかつた。幸さいわい、その侍の相方あいかたの籤くじを引いた楓は、面体めんていから持ち物まで、かなりはつきりした記憶を持つていた。のみならず

彼が二三日中に、江戸を立つて雲州松江へ赴こうとしている事なぞも、ちらりと小耳に挟んでいた。求馬は勿論喜んだ。が、再び敵打の旅に上るために、楓と当分——あるいは永久に別れなければならぬ事を思うと、自然求馬の心は勇まなかつた。彼はその日彼女を相手に、いつもに似合わず爛酔した。そうして宿へ帰つて来ると、すぐに夥しく血を吐いた。求馬は翌日から枕についた。が、何故か敵の行方が略わかつた事は、一言も甚太夫には話さなかつた。甚太夫は袖乞いに出る合い間を見ては、求馬の看病にも心を尽した。ところがある日葺屋町の芝居小屋などを徘徊して、暮方宿へ帰つて見ると、求馬は遺書を啣えたまま、もう火のはいった行燈の前に、刀を腹へ突き立てて、無残な最後を遂げていた。甚太夫はさすがに仰天しながら、ともかくもその遺書を開いて見た。遺

書には敵の消息と自刃じじんの仔細しさいとが認めしたたてあつた。「私儀わたくしげ柔弱じやく多病たびやうにつき、敵打の本懐も遂げ難きやに存ぞうろうぜられ候間あいだ……」
——これがその仔細の全部であつた。しかし血に染んだ遺書の中には、もう一通の書面が巻きこんであつた。甚太夫はこの書面へ眼を通すと、おもむろに行燈をひき寄せて、燈心とうしんの火をそれへ移した。火はめらめらと紙を焼いて、甚太夫の苦にがい顔を照らした。

書面は求馬が今年ことしの春、楓かえでと二世にせの約束をした起請文きしようもんの一枚であつた。

寛文十年の夏、甚太夫は喜三郎と共に、雲州松江の城下へ
はいった。始めて大橋の上に立つて、宍道湖の天に群つてい
る雲の峰を眺めた時、二人の心には云い合せたように、悲壯
な感激が催された。考えて見れば一行は、故郷の熊本を後に
してから、ちようどこれで旅の空に四度目の夏を迎えるので
あつた。

彼等はまず京橋界隈の旅籠に宿を定めると、翌日からすぐ
に例のごとく、敵の所在を窺い始めた。するとそろそろ秋が
立つ頃になつて、やはり松平家の侍に不伝流の指南をしてい
る、恩地小左衛門と云う侍の屋敷に、兵衛らしい侍のかくま
われている事が明かになつた。二人は今度こそ本望が達せら
れると思つた。いや、達せずには置かないと思つた。殊に甚
太夫はそれがわかつた日から、時々心頭に抑え難い怒と喜を

感ぜずにはいられなかつた。兵衛はすでに平太郎一人の敵ではなく、左近さこんの敵でもあれば、求馬もとめの敵でもあつた。が、それよりも先にこの三年間、彼に幾多の艱難を嘗なめさせた彼自身おんてきの怨敵であつた。——甚太夫はそう思うと、日頃沈着な彼にも似合わず、すぐさま恩地の屋敷へ踏みこんで、勝負を決したいような心もちさえした。

しかし恩地小左衛門は、山陰さんいんに名だたる劍客であつた。それだけにまた彼の手足しゅそくとなる門弟の数も多かつた。甚太夫はそこで惴はやりながらも、兵衛が一人外出する機会を待たなければならなかつた。

機会は容易に來なかつた。兵衛はほとんど昼夜とも、屋敷にとじこもっているらしかつた。その内に彼等の旅籠はたごの庭には、もう百日紅ひゃくじつこうの花が散つて、踏石ふみいしに落ちる日の光も次第に

弱くなり始めた。二人は苦しい焦燥の中に、三年以前返り打に遇つた左近の祥月命日を迎えた。喜三郎はその夜、近くにある祥光院の門を敲いて和尚に仏事を修して貰つた。が、万一を慮つて、左近の俗名は洩らさずにいた。すると寺の本堂に、意外にも左近と平太郎との俗名を記した位牌があつた。喜三郎は仏事が終つてから、何気ない風を装つて、所化にその位牌の由縁を尋ねた。ところがさらに意外な事には、祥光院の檀家たる恩地小左衛門のかかり人が、月に二度の命日には必ず回向に来ると云う答があつた。「今日も早くに見えました。」——所化は何も気がつかないように、こんな事までもつけ加えた。喜三郎は寺の門を出ながら、加納親子や左近の霊が彼等に冥助を与えているような、気強さを感じずにはいられなかつた。

甚太夫は喜三郎の話を聞きながら、天運の到来を祝すと共に、今まで兵衛の寺詣てらもちでに気づかなかつた事を口惜くちおしく思つた。「もう八日ようか経てば、大檀那おおだんなさま様の御命日でございます。御命日に敵が打てますのも、何かの因縁でございます。——喜三郎はこう云つて、この喜ばしい話を終つた。そんな心もちは甚太夫にもあつた。二人はそれから行燈あんどんを囲んで、夜もすがら左近や加納親子の追憶をさまざま語り合つた。が、彼等の菩提ぼだいを弔とむらひつてゐる兵衛の心を酌くむ事などは、二人とも全然忘却してゐた。

平太郎の命日は、一日毎に近づいて来た。二人は妬刃ねたばを合せながら、心静しずかにその日を待った。今はもう敵打かたきうちは、成否の問題ではなくなつてゐた。すべての懸案はただその日、ただその時刻だけであつた。甚太夫は本望ほんもうを遂とげた後ののち、逃のき口くち

まで思い定めていた。

ついにその日の朝が来た。二人はまだ天が明けない内に、あんどう行燈の光で身仕度をした。甚太夫はしょうぶがわ菖蒲革の裁付にたつつけ黒紬の袷あわせを重ねて、同じ紬の紋付の羽織の下に細い革の襷たすきをかけた。さしりょう差料は長谷部則長の刀にらいくにとし来国俊の脇差わきざしであった。喜三郎も羽織は着なかつたが、肌はだには着込みを纏まとっていた。二人は冷酒ひやざけの盃を換かわしてから、今日までの勘定をすませた後、勢いよくはたご旅籠の門かどを出た。

外はまだ人通りがなかつた。二人はそれでも編笠に顔を包んで、兼ねて敵打の場所と定めたしょうこういん祥光院の門前へ向つた。ところが宿を離れて一二町行くと、甚太夫は急に足を止めて、「待てよ。今朝けさの勘定は四文釣銭しもんが足らなかつた。おれはこれから引き返して、釣銭の残りを取って来るわ。」と云つた。

喜三郎はもどかしそうに、「高たかが四文のはした錢ぜにではございませんか。御戻りになるがものはございますまい。」と云つて、一刻も早く鼻の先の祥光院まで行つていようとした。しかし甚太夫は聞かなかつた。「鳥目ちようもくは元より惜しくはない。だが甚太夫ほどの侍も、敵打の前にはうろたえて、旅籠の勘定を誤つたとあつては、末代まつだいまでの恥辱になるわ。その方は一足先へ参れ。身どもは宿まで取つて返そう。」——彼はこう云い放つて、一人旅籠へ引き返した。喜三郎は甚太夫の覚悟に感服しながら、云われた通り自分だけ敵打の場所へ急いだ。

が、ほどなく甚太夫も、祥光院の門前に待つていた喜三郎と一しよになつた。その日は薄雲が空に迷つて、朧おぼろげな日ざしはありながら、時々雨の降る天気であつた。二人は両方に立ち別れて、棗なつめの葉が黄ばんでいる寺の塀外へいそとを徘徊はいかいしながら、

勇んで兵衛の参詣を待った。

しかしかれこれ午ひる近くなつても、未いまだに兵衛は見えなかつた。喜三郎はいら立つて、さりげなく彼の参詣の有無を寺の門番に尋ねて見た。が、門番の答にも、やはり今日はどうしたのだから、まだ参られぬと云う事であつた。

二人は惴はやる心を静めて、じつと寺の外に立つていた。その間に時は用捨なく移つて、やがて夕暮の色と共に、棗の実を食はみ落す鴉からすの聲が、寂しく空に響くようになった。喜三郎は氣を揉もんで、甚太夫の側へ寄ると、「一そ恩地の屋敷の外へ参つて居りましょうか。」と囁ささいた。が、甚太夫は頭かしらを振つて、許す氣色けしきも見せなかつた。

やがて寺の門の空には、這はい塞ふさつた雲の間に、疎まばらな星影まばらがちらつき出した。けれども甚太夫は塀へいに身を寄せて、執念しゅうねく

兵衛を待ち続けた。實際敵を持つ兵衛の身としては、夜更よふけに人知れず仏参をすます事がないとも限らなかつた。

とうとう初夜しよやの鐘が鳴った。それから二更にこうの鐘が鳴った。二人は露に濡れながら、まだ寺のほとりを去らずにいた。

が、兵衛はいつまで経つても、ついに姿を現さなかつた。

大団円

甚じん太夫だゆう主従は宿を変えて、さらに兵衛ひょうえをつけ狙った。が、その後ご四五日すると、甚太夫は突然真夜中から、烈しい吐瀉としゃを催し出した。喜三郎きさぶろうは心配の余り、すぐにも医者を迎えたかったが、病人は大事の洩れるのを惧おそれて、どうしてもそれを許さなかった。

甚太夫は枕に沈んだまま、買い薬を命に日を送った。しかし吐瀉は止まなかつた。喜三郎はどうとう堪え兼ねて、一応医者しんみやくの診脈を請うべく、ようやく病人を納得させた。そこで取りあえず旅籠はたしの主人に、かかりつけの医者を迎えて貰った。主人はすぐに人を走らせて、近くに技ぎを売っている、松木蘭袋まつきらんたいと云う医者を呼びにやった。

蘭袋は向井靈蘭むかいれいらんの門に学んだ、神方しんぼうの名の高い人物であつた。が、一方また豪傑肌ごうけつはだの所もあつて、日夜杯さかすきに親みながらさらに黄白こうはくを意としなかつた。「天雲あまくもの上をかけるも谷水をわたるも鶴つるのつとめなりけり」——みずかこう自ら歌つたほど、彼の薬を請うものは、上かみは一藩の老職から、下しもは露命も繋つなぎ難い乞食こじき非人ひにんにまで及んでいた。

蘭袋は甚太夫の脈をとつて見るまでもなく、痢病りびようと云う見

立てを下した。くだしかしこの名医の薬を飲むようになってもやはり甚太夫の病は癒なほらなかつた。喜三郎は看病の傍かたわら、ひたすら諸々の仏神に甚太夫の快方を祈願した。病人も夜長の枕元に薬を煮にる煙を嗅かぎながら、多年の本望を遂げるまでは、どうかして生きていたいと念じていた。

秋は益ますます深くなつた。喜三郎は蘭袋の家へ薬を取りに行く途中、群を成した水鳥が、屢しばしば空を渡るのを見た。するとある日彼は蘭袋の家の玄関で、やはり薬を貰もらいに來ている一人の仲間ちゅうげんと落ち合つた。それが恩地小左衛門おんちこざえもんの屋敷のものだと云う事は、蘭袋の内弟子うちでしと話している言葉にも自ら明おのずかかであつた。彼はその仲間が帰つてから、顔馴染かおなじみの内弟子に向つて、「恩地殿のような武芸者も、病には勝てぬと見えますな。」と云つた。「いえ、病人は恩地様ではありません。あそこに御出

でになる御客人です。」——人の好きそうな内弟子は、無頓着にこう返事をした。

それ以来喜三郎は薬を貰いに行く度に、さりげなく兵衛の容子ようすを探った。ところがだんだん聞き出して見ると、兵衛はちようど平太郎の命日頃から、甚太夫と同じ痢病のために、苦しんでいると云う事がわかった。して見れば兵衛が祥光院へ、あの日に限つて詣もつでなかつたのも、その病のせいに違ひなかつた。甚太夫はこの話を聞くと、一層病苦に堪えられなくなつた。もし兵衛が病死したら、勿論いくら打ちたくとも、敵かたきの打てる筈はなかつた。と云つて兵衛が生きたにせよ、彼自身が命を墜おとしたら、やはり永年の艱難は水泡に帰すのも同然であつた。彼はついに枕まくらを噛かみながら、彼自身の快癒を祈ると共に、併せて敵かたき瀬沼兵衛せぬまひょうえの快癒も祈らざるを得なかつ

た。

が、運命は飽くまでも、田岡甚太夫に刻薄こくはくであつた。彼の病は重おもりに重つて、蘭袋らんたいの薬を貰つてから、まだ十日と経たない内に、今日か明日かと云う容態ようたいになつた。彼はそう云う苦痛の中にも、執念しゅうねく敵打かたきうちの望を忘れなかつた。喜三郎は彼の呻吟しんぎんの中に、しばしば八幡大菩薩と云う言葉がかすかに洩れるのを聞いた。殊にある夜は喜三郎が、例のごとく薬を勧めると、甚太夫はじつと彼を見て、「喜三郎。」と弱い声を出した。それからまたしばらくして、「おれは命が惜しいわ。」と云つた。喜三郎は畳へ手をついたまま、顔を擡もたげる事さえ出来なかつた。

その翌日、甚太夫は急に思い立って、喜三郎に蘭袋を迎えにやつた。蘭袋はその日も酒気を帯びて、早速彼の病床を見

舞った。「先生、永々の御介抱、甚太夫辱く存じ申す。」——
彼は蘭袋の顔を見ると、床の上に起直つて、苦しそうにこう
云つた。「が、身ども息のある内に、先生を御見かけ申し、何
分願いたい一儀がござる。御聞き届け下さりようか。」蘭袋は
快く領いた。すると甚太夫は途切れ途切れに、彼が瀬沼兵衛
をつけ狙う敵打の仔細を話し出した。彼の声はかすかであつ
たが、言葉は長物語の間にも、さらに乱れる容子がなかつた。
蘭袋は眉をひそめながら、熱心に耳を澄ませていた。が、や
がて話が終ると、甚太夫はもう喘ぎながら、「身ども今生の思
い出には、兵衛の容態が承りとうござる。兵衛はまだ存命で
ござるか。」と云つた。喜三郎はすでに泣いていた。蘭袋もこ
の言葉を聞いた時には、涙が抑えられないようであつた。し
かし彼は膝を進ませると、病人の耳へ口をつけるようにして、

「御安心めされい。兵衛殿の臨終は、今朝寅の上刻に、愚老
確かに見届け申した。」と云った。甚太夫の顔には微笑が浮ん
だ。それと同時に窶れた頬へ、冷たく涙の痕が見えた。「兵衛
——兵衛は冥加な奴でござる。」——甚太夫は口惜しそうに呟
いたまま、蘭袋に礼を云うつもりか、床の上へ乱れた頭を垂
れた。そうしてついに空しくなった。……

寛文十年陰曆十月の末、喜三郎は独り蘭袋に辞して、故郷
熊本へ帰る旅程に上った。彼の振分けの行李の中には、求馬
左近甚太夫の三人の遺髪がはいっていた。

後談

寛文十一年の正月、雲州松江祥光院の墓所には、四基の石塔が建てられた。施主は緊く秘したと見えて、誰も知つてゐるものはなかつた。が、その石塔が建つた時、二人の僧形が紅梅の枝を提げて、朝早く祥光院の門をくぐつた。その一人は城下に名高い、松木蘭袋に紛れなかつた。もう

一人の僧形は、見る影もなく病み耄ほうけていたが、それでも凜り々しい物ごしに、どこか武士らしい容よう子すがあつた。二人は墓前に紅梅の枝を手向たむけた。それから新しい四基の石塔に順々に水を注いで行つた。……

後年おうばくえりん黄檗慧林の会下えかに、当時の病み耄ほうけた僧形とよく似寄つた老衲ろうのうし子しがあつた。これも順鶴じゆんかくと云そうう僧名みょうのほかは、何も素性すじょうの知れない人物であつた。

(大正九年四月)

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 12 月 1 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 4 月 1 日第 8 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第二巻」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月 5 日初版第 1 刷発行

初出：「雄弁」

1920（大正 9）年 5 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 12 日公開

2017 年 6 月 4 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制
作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。